

「神の国のたとえ」

ルカの福音書 13:18~21

はじめに

今回は、十八年もの間腰が曲がったままの女性がイエシュアによって癒されたという出来事でした。イエシュアはこの女性を「サタンに縛られていた」「アブラハムの娘」と呼ばれましたが、ここに終わりの日に起こる「その日、わたしは倒れているダビデの仮庵を起こす。(アモス 9:11)」というイスラエル再興の預言の「型」があるということを述べました。なぜならそれはこの「起こす」と訳されているヘブル語のクーム(קום)が、女性の「曲がった腰を伸ばす」という意味としても使われていたからです。ちなみにアブラハムの娘の「娘」という意味のバト(בת)は「家、国」を意味するベート(בית)と語根が同じです。ですから「アブラハムの娘の腰をのぼす」という御業の中に「イスラエルの倒れた家を起こす、建て直す」という神のご計画が秘められているというわけです。またこの「起こす」という意味のクームは死人を「起こす」という意味の復活用語とも言われます。事実、マルコ 5:41 でイエシュアは会堂司ヤイロの娘を「タリタ (少女よ) クム (起きなさい)」と言って生き返らせました。しかしこのクームは本来、これとは全く異なる意味の言葉で、その本来の意味はなんと「襲いかかって殺す」という意味の言葉なのです。その初出箇所は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

4:8 カインは弟アベルを誘い出した。二人が野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかって殺した。

これは人類史上最初の殺人と言われるカインとアベルについての出来事ですが、ここに聖書で最初のクームがあります。カインは兄弟アベルを妬み、そして憎むべき敵としてこれにクーム「襲いかかって殺した」のでした。ですから倒れたダビデの仮庵すなわちイスラエル王国をクーム、起こすこととは、イスラエルのすべての敵に立ち向かってこれらを襲い、そして殺す、打ち滅ぼすということでもあるのです。その敵とはもちろん悪魔サタンとなりますが（そもそもこのサタン、ヘブル語のサターン(שָׂטָן)という言葉の意味自体が「敵」という意味です。）そのイスラエルの敵、イスラエルの王なるメシアによって打ち倒され、滅ぼされることになるこの敵とは一体どのようにして現れ、また何をなそうとするのか、ということが今日扱うイエシュアのたとえには奥義として秘められています。ですから今日の内容はイエシュアについてというよりも敵であるサタンについて、その現れと働きについてのものとなっています。イエシュアによって「神の国」が成就するためには、その障害となる敵は完全に排斥、滅ぼさなければならない存在です。言うなればこの敵に襲いかかり、打ち滅ぼすことによって、イスラエルの王なるメシアがその敵に勝利することによって「神の国」がこの地上に成就するのです。ですからその敵を知ることまた「神の国」を知ることと言えるのです。そしてこれもまた終わりの日において現実となるものであること、そして敵の計画ではなく、神のご計画の一部であることを覚えていただきたいのです。では今日の内容に入ってまいりましょう。真理の御霊の助けがありますように。

1. 似ている

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は何に似ているでしょうか。何にたとえたらよいでしょうか。」

「神の国は何に似ているでしょうか」とイエシュアは問いかけておられますが、ここに使われている「似ている」という意味のダーマー(המך)の初出箇所を見てください。

民数記【新改訳 2017】

33:50 エリコをのぞむヨルダン川のほとりのモアブの草原で、主はモーセに告げられた。

33:51 「イスラエルの子らに告げよ。あなたがたがヨルダン川を渡ってカナンへの地に入るときには、

33:52 その地の住民をことごとくあなたがたの前から追い払って、彼らの石像をすべて粉碎し、彼らの銅像をすべて粉碎し、彼らの高き所をすべて打ち壊さなければならない。

33:55 もしその地の住民をあなたがたの前から追い払わなければ、あなたがたが残しておく者たちは、あなたがたの目のとげとなり、脇腹の茨となり、彼らはあなたがたが住むその土地であなたがたを苦しめる。

33:56 そしてわたしは、彼らに対してしようと計画したとおりを、あなたがたに対してすることになる。」

これは預言者モーセの時代、エジプトの奴隷から解放されたイスラエルが約束の地カナンに入って行く時に主が命じられたものです。主はカナン人と彼らの偶像をすべて打ち滅ぼすようにと命じられ、それが主が「彼らに対してしようと計画したとおり」のものであり、ここに聖書で最初のダーマーが使われています。このようにダーマーとは本来、**イスラエルの敵をすべて滅ぼす計画**を指し示す言葉なのです。ですから「神の国は何に似ているでしょうか」というイエシュアの御言葉には、先ほど述べたようにイスラエルの敵すなわち「神の国」のために打ち滅ぼさなければならない敵の存在が指し示されているのです。ですから次に記されているイエシュアの「神の国のたとえ」はそのような視点をもって読み取らなければならないのです。

2. からし種のたとえ

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:19 それはからし種に似ています。ある人がそれを取って自分の庭に蒔くと、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」

このたとえは旧約聖書の知識がなければ絶対に読み解けません。その知識がないままでこれを理解しようとするならば、きっと自分のことにこれを置き換え、ぼんやりとしたささやかな自分の成長や繁栄を思うだけのものとなってしまいます。実際にかつての私がそうでした。しかしこのたとえは旧約聖書の一つの夢、一つの預言と結びついているのです。それは以下のものです。

ダニエル書【新改訳 2017】

4:10 私の寝床で幻が頭に浮かんだ。私が眺めていると、見よ、地の中央に木があった。それは非常に高かった。

4:11 その木は生長して強くなり、その高さは天に届いて、地の果てのどこからもそれが見えた。

4:12 葉は美しく、実も豊かで、その木にはすべてのものの食べ物があつた。その木陰では野の獣が憩い、その枝には空の鳥が住み、すべての肉なるものはそれによって養われた。

これはバビロンの王ネブカドネツアルが見た夢です。預言者ダニエルはこれを、夢を見た王自身のことだと解き明かし、その支配と国が大いに栄えることを預言しました。イエシュアはこの預言を指し示し、終わりの日にもこのような一人の王がバビロンから現れ、絶大な権力を持つようになることを預言してこのたとえを話されたのです。なぜならバビロンの王ネブカドネツアルが見た夢にはこのような続きがあるからです。

4:13 寝床で頭に浮かんだ幻の中で見ていると、見よ、一人の見張りの者、聖なる者が天から降りて来るではないか。

4:14 彼は力強く叫んで、こう言った。『その木を切り倒し、枝を切り払え。その葉を振り落とし、実を投げ散らせ。獣をその下から、鳥をその枝から追い払え。』

4:15 ただし、その根株は、鉄と青銅の鎖をかけて、地に、野の若草の中に残せ。天の露にぬれさせて、地の青草を獣と分け合うようにせよ。

4:16 その心を、人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ぎ行かせよ。

実際にこのようなことがネブカドネツアル自身にも起こります（ダニエル 4:33）。しかしそれは終わりの日に起こることの「型」予表であり、究極的には「人間の心から変えて、獣の心をそれに与え、七つの時をその上に過ぎ行かせよ」とあるように、黙示録の獣と呼ばれる反キリストが現れる、世の終わりの七年間の患難時代を指し示しているのです。やがて今の混沌とした時代を統一しようとする一人の絶大な権力を持った王が地上に現れます。この王は人間の心を持った人道的な指導者として現れますが、やがて「獣の心」を持った王、暴君へと変貌し、神に逆らい、自らを神とし、従わない者を皆殺しにします。そして彼は人類史上最強、最悪の存在としてこの地上に君臨することになります。なぜこのような者が現れ、このようなことが起こるのでしょう。預言者ダニエルはこの夢を解き明かした後、こう述べています。

ダニエル書【新改訳 2017】

4:25…こうして、あなたの上を七つの時が過ぎ行き、ついにあなたは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者にお与えになることを知るようになります。

「いと高き方」とは神の御子イエシュアをおいて他にいません。この御方が「人間の国を支配」するため、そして「みこころにかなう者」すなわちイスラエルの神、主だけを神とする者たちに「神の国」を「お与えになることを知るように」するために、神はこのようなご計画を立てておられるのです。つまり、イエシュアのたとえられた「からし種」とはバビロンの王にもたとえられた終わりの日の獣、反キリストの存

在を指しており、これに「**いと高き方**」イエシュアが勝利することによって地上に「神の国」が成就するということがたとえによって示されているのです。

ちなみにこの「**からし種**」という植物は本来、イスラエル原産の植物ではありません。創世記 43:11 でヤコブがイスラエルの名産品の数々を挙げていますがそこに「**からし種**」はありません。それどころか「**からし種**」と訳される言葉自体が旧約聖書にはなく、原文で見てもそれは存在しません。つまり「**からし種**」は外来植物であり、異邦の地からいつの間にかイスラエルの中に入り込んだ、紛れ込んだ存在なのです。この事実はこの後に続く「パン種を粉に混ぜる」というたとえともつながってきます。このような働き方をするのが獣、反キリストです。彼は初めはイスラエルの友のように現れ、巧みに彼らの中に入りていき、やがて彼らと平和の条約、契約を交わすまでにいたります（ダニ9:27）。しかしやがてその契約を破り、エルサレムの神殿を奪い、自分への礼拝を強要するようにさえなるのです。この事実についてイエシュアは同様にこの「**からし種**」を用いてこのようなたとえも話されています。

マタイの福音書【新改訳 2017】

17:20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに言います。もし、**からし種**ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません。」

これは「ああ、不信仰な曲がった時代」だと言われ、悪霊を追い出すことができなかった弟子たちに対して語られたものですが、この訳では信仰があれば何でもできる、というような教えとして受け取ってしまいます。しかし、終わりの日の神のご計画の視点でこれを解釈するならば、やがて不信仰な曲がった時代、大きな患難の時代となり「**からし種**」のような反キリストが巨大な木となり、シオンの「山」すなわちエルサレムの神殿を自分の神殿へと変え、イスラエルの民をそこから移す、追い出すということがやがて起こる、という意味になるのです。ですからこれは「あなたがたにできないことは何もありません。」と訳すよりも「あなたがたのうえにこれが起こらないことはない」つまり必ずそれは起こる、成就するのだ、と理解すべきたとえなのです。このように、「**からし種**」とは、世の終わりに現れる獣、不法の子とも言われる反キリストを指し示しているのです。ちなみにこのからし種の木に巣を作る「**空の鳥**」は、イエシュアのたとえの中でも有名な「種蒔きのたとえ」で、人の心から御言葉を取り去る悪魔のたとえとして用いられています（ルカ8:12）。反キリストと悪魔サタンは木と木に宿る鳥のような密接な共生関係持ち、一つになって働くこともまたここにはたとえられているのです。しかしそれは同時にこの獣と悪魔を一網打尽に滅ぼすためにイスラエルのメシア、神の御子イエシュアはこの地上に来られる、という神のご計画につながることを忘れてはなりません。

3. パン種

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:20 再びイエスは言われた。「神の国を何にたとえたらよいでしょうか。

13:21 それはパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの粉に混ぜると、全体がふくらみました。」

先ほどのからし種がここでは「パン種」にたとえられています。つまりこれもまた獣、反キリストを表しています。これを「女の人」が「三サトンの粉」に「混ぜる」とは一体どういう意味でしょう。まず「女の人」と「三サトン（旧約ではセア）の粉」についてですが、これは以下の出来事と結びついています。

創世記【新改訳 2017】

18:1 主は、マムレの檜の木のところ、アブラハムに現れた。彼は、日の暑いころ、天幕の入り口に座っていた。

18:2 彼が目を上げて見ると、なんと、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはそれを見るなり、彼らを迎えようと天幕の入り口から走って行き、地にひれ伏した。

18:3 彼は言った。「主よ。もしもよろしければ、どうか、しもべのところを素通りなさないでください。

18:4 水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、この木の下でお休みください。

18:6 アブラハムは、天幕のサラのところに急いで行って、「早く、三セアの上等の小麦粉をこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。

18:8 それからアブラハムは、凝乳と牛乳と、料理した子牛を持って来て、彼らの前に出したので、彼らは食べた。彼自身は木の下で給仕をしていた。

主をもてなすためにアブラハムが妻サラに作らせた「三セアの上等の小麦粉」のパン菓子、これがイエシュアのたとえと結びついています。つまりこれはイスラエルの神、主がアブラハムの家に来られ、アブラハムはこれを熱心に呼び求め、主をお迎えし、お仕えする、という出来事を指し示すものであり、主とアブラハムの家すなわちイスラエルとの交わり、イスラエルの民が主を礼拝することを表すものとも言えます。ちなみにサラの作ったパン菓子は急いで作っているため発酵に時間のかかるパン種は入っていません。そのような主とイスラエルとの交わり、礼拝の中に「パン種」を「混ぜる」ような出来事とは一体何でしょう。この「混ぜる」と訳されているターマン(תַּמְנָן)の初出箇所を見てください。

創世記【新改訳 2017】

35:4 彼らは、手にしていたすべての異国の神々と、耳につけていた耳輪をヤコブに渡した。ヤコブはそれらを、シェケムの近くにある檜の木の下に埋めた。

このようにターマンとは本来、「すべての異国の神々」と「耳輪」を「埋め」る「混ぜる」という意味の言葉なのです。つまりイスラエルと主との交わりの中に偶像礼拝が混ざるのである。また耳輪は耳に穴をあけてつけるためそれは奴隷を意味する品でもあります（出 21:6）。偶像礼拝と奴隷の苦しみこれらがイスラエルと主との交わりを汚す、引き裂く出来事がイスラエルの歴史において三度繰り返されます。まず一つ目はソロモンが建てたエルサレムの第一神殿においてです。王であるソロモン自身が偶像礼拝に陥り、続く王たちもたびたびこれを踏襲し、やがてバビロンによって破壊され、民はその奴隷、捕囚となってしまいます。そして二つ目はゼルバベルが建てた第二神殿です。イエシュアがこれを「強盗の巣」と呼ばれるほどに墮落し、やがてローマによって破壊され、民は国を失います。そして最後の三つ目は未だ実現していませんが、終わりの日に建てられるエルサレムの第三神殿において、これを獣、反キリストが奪い自身を

神として拝ませる場所へと変貌させ、イスラエルの民を根絶やしにしようします。これら三つの出来事が「女の人がそれを取って三サトンの粉に混ぜる」というたとえに秘められた神のご計画、神の国の奥義です。これら三つの出来事がすべて起こり、そしてこの「パン種」をすべて取り除くためにイエシュアは来られるのです。以下は「パン種」という意味のセオール(רָאוּשׁ)の初出箇所です。

出エジプト記【新改訳 2017】

12:14 この日は、あなたがたにとって記念となる。あなたがたはその日を主への祭りとして祝い、代々守るべき永遠の掟として、これを祝わなければならない。

12:15 七日間、種なしパンを食べなければならない。その最初の日に、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から七日目までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

このように、イスラエルの「家からパン種を取り除かなければならない」「種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られる」とあるように、**セオールとは本来、イスラエルから完全に取り除かれるべきもの、断ち切られるべき存在を指す言葉なのです**。パンを膨らませ、また美味しくするという一般的な概念でこれを捉えてはいけません。聖書においてそれは罪をもたらす敵サタンおよび反キリストを指すのです。それらすべてをこの地上からことごとく滅ぼし、取り除く御方、それがイスラエルのメシア、主イエシュアなのです。ちなみにパン種が入ったパンのことをハーメーツ(חָמֵץ)と言い、イエシュアのたとえで「全体がふくらみました」という訳にも使われているのですが、まさに反キリストとその勢力は再臨のイエシュアによって全てハーメーツ、ハメツ、破滅することになるのです。こう預言されているとおりです。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

「生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた」なんとも惨い、恐ろしい光景です。しかし終わりの日、これらのことが成就しなければ「神の国」は完成しません。ですから「神の国」を求める、待ち望むとは、敵が生きたまま硫黄の燃える火の池に投げ込まれることを求めることでもあるということをご今日ぜひ知ってください。イスラエルを愛する主、そしてイスラエルの敵を憎まれる主の思いを共有する者へと私たち一人ひとりが変えられていきますように祈ります。